

# 言語生得説への疑問

堀 素 子  
F. C. パ ン

## I “Syntax-Centered” Acquisition Theory の誤まり

### 1. Pivot-Open Construction

過去数年間にわたって多くの論議をかもしながらも言語習得の一つのモデルとして各書に紹介されてきた Pivot-Open Hypothesis の妥当性をまず考えてみたい。この説は発表当初から疑問視されていたようだが、たまたま当時流行し始めていた生成文法理論に深くかかわっていたことから次第に支持者を得、日本国内で出版される児童心理学関係図書に引用されることが多くなった。(例えば、村田 1973 : 277—328 ; 吉田 1976 : 192—204 等) しかしそれらの引用は多く、簡略に幼児語には Pivot class と Open class の二種があるとして、McNeil のリスト (正確には McNeil が引用した Braine 他のリスト) や、生成文法の tree-structure を引用しているのみで、例えば村田は、藤永の編になる児童心理学入門書にそれに対する疑問の意は述べているが、どこがどのように疑問かということについては言及していない。(村田 1973 : 325, 他に吉田 1976 : 194—5) しかも同じ藤永の編による二年後の論文集の言語発達の章は別の著者によるものだが、McNeil にも生成文法にも一言もふれていない。(芳賀 1975) この変化は何を物語るものであろうか。

まず Pivot-Open 説が言語獲得のモデルとなりうるかという点を考えてみたい。McNeil はこの仮説を導くに当たって重要な前提を置いている。

Sometime between eighteen and twenty-four months, most children begin to form simple two- and three-word sentences. Because our evidence is limited to what a child says, this is the earliest point at which we can study grammar.<sup>1</sup> Before that time, roughly from the first birthday, children utter single words, but they produce none of the patterned speech from which a grammatical account is written.<sup>2</sup> (McNeil 1966: 18)

下線は筆者によるものだが、ここに彼の言語獲得説の問題点がある。即ち、下線部 1, 2 に共通している点として、“study grammar,” “grammatical account” ということばがあるが、grammar の説明が即ち言語獲得の説明といえるかどうかということが第一点、第二点は、1 に “our evidence is limited to what a child says” とあるが、evidence を自らそのように幼児の発話のみに限定してよいであろうかということ、第三には、2 の “they produce none of the patterned speech” とあるが、それは speech を verbal でしかも成人からみて成人語に refer できるものだけに限定しているということで、言語の習得をそのような観点からのみ把えてよいのであろうかという点である。

この三つの疑問点はおそらくそのまま当時の生成文法内の言語習得理論にも適用できると思われる。即ち、幼児が文法を獲得するメカニズムのあまりの複雑さに（幼児語の文法を組立てるためにいくつもの規則や変形が必要と思われたので）、このような複雑な文法を単なる模倣や繰返しによって3年や4年で完全に習得することは不可能であり、故に、それを可能ならしめる特別の装置が人間の頭の中に生得的に備わっているのであろう、と結論づけ、これをLADあるいはLASと名づけた。(McNeil 1966: 38—9, 48—50)

この考えは生成文法理論を行動主義理論から分つ最も基本的なものと思

われるが、同じ生成理論を用いる Slobin できえ、McNeil のこの発表に対しては次のような疑問を投げかけている。

The main problem raised by McNeil's paper is the proposal of a significant innate component in language acquisition—the LAD or LAS of Chomsky, Katz, *et al.*.... The problem that troubles me is how to determine just what sorts of things should be considered as “preprogrammed.” To what extent is a human child “wired up” with linguistic competence—and with specifically linguistic competence? (Slobin 1966: 87)

McNeil が P-O 説を発表した Language Development in Children の大会 (1966) の *Proceedings* の編者も “General Discussion” という報告の中で次のような批評を述べている。

While agreeing that it was probably necessary to postulate a language-acquisition device with a large innate component, Slobin had expressed concern about just when appeal should be made to an innate device for explanatory purposes. It was a little too easy to throw a lot of problems into a basket labeled “built in”.... It would be much more accurate to say the innate components were simply potentialities that would develop if the environment presented the occasion for them to do so; they were the things that an organism would learn easily, quickly, and immediately; the way it would structure its experience in order to profit from it. (Smith and Miller 1966: 101)

これからわずか4年後に出版された著書で Bloom は P-O 説の欠陥に気づき、生成文法の枠内で執筆しているにもかかわらず LAD に一言もふれていない。それどころか彼女は次のような批判を述べている。

However, the distributional analysis used to obtain 'pivot grammars' ignored the linguistic function of utterances— notions of linguistic contrast, interpretation, 'meaning' or reference were not considered. It can be demonstrated that the notion of 'pivot grammar' describes children's utterances in only the most superficial way. (Bloom 1970: 5)

その例として彼女は "Mommy sock" という同じ語が全く異った状況で異った意味内容をもって発話されたことを挙げている。(1970: 5—6) そしてこのことから幼児の言語習得の研究には発話された文以外の要点、即ち "aid of the situation" が必要だという Leopold の説を引いて (ibid: 9) 彼女自身の調査を進める際、次のことを念頭において行ったと述べている。

For the purpose of this study, evaluation of the children's language began with the basic assumption that it was possible to reach the semantics of children's sentences by considering nonlinguistic information from context and behavior in relation to linguistic performance.... The only claim that could be made was that evaluation of an utterance in relation to the context in which it occurred provided more information for analyzing intrinsic structure than would a simple distributional analysis of the recorded corpus. (Bloom 1970: 10)

これを受けて日本でも吉田は日本語児の二語文の統語構造を述べるにあたって P-O 説をとらず独自の叙述をしているが、これは生成文法出現以前から大久保や村田らが児童心理学の中で行ってきたことと大差ない。

なお生成文法の枠外から P-O 説の誤りを指摘し、幼児の発話の相手やその状況等、言語外の要素を考慮に入れる必要性を強調した論文は数多くあるが、それらを一つ一つ引用するまでもなく、その言語観から推して当然のことであろう。

## 2. “The Child’s Own Grammar” の誤まり

### (1) “Comed,” “Goed” の解釈

幼児は模倣によらず彼の生得的言語能力によって文を生成するという推論の一つの強力な論拠として、英語児が一度 *came*, *went*, *sat* 等の不規則動詞の過去形を使うようになっていながら、ある日突然それを捨てて規則動詞化した *comed*, *goed*, *sitted* 等を使うようになった Ervin の調査 (1964) の例がよく引用される。そしてこれこそ幼児が周囲の発話の模倣でなく自己の文法に従って文を生成して行く証拠であるとする。(McNeil 1966: 70—2)

これに関しては前述の大会で Premack が相当 McNeil と論争した模様で、後者がこれこそ *rule* の適用であると主張したのに対し、前者はその *rule* という概念こそ、以前から *classification* と呼ばれているものに他ならないと言い返し、そこで一せいに議論が百出したということである。(Smith and Miller 1966: 98—9)

中でも McNeil が、幼児は *went* から *goed* あるいは *wented* に進むと述べたのに対し、Fodor はその矛盾をついて、それならば *went* が過去形と認識されていたとする推論は成立しない、と次のようにいっている。

the assumption that *went* was in fact coded as “verb + past”

would be compatible with the child producing goed but not wented. (Smith and Miller 1966: 100)

これに対する McNeil の反論は単に “there could be a more complicated rule” と述べただけであった。このような double markings はフランス語児にもドイツ語児にもあるという例が出された。もし came, went が過去形として認識されていなかったからだとすれば、幼児が comed, goed, wented に移ったのは自己の生得文法に従ったのではなく、単に -ed 形が過去を表現する場合に “規則的に” 使われるのを聞いてきたからであろう。

(2) “The Child’s Own Grammar” ?

日本語児の場合、同様な移行が見られるかどうかを、男児（野地澄晴ちゃん）の誕生時から6歳までの言語、非言語をその出現に関連したと思われる周囲の人間や状況を含めて詳細に記録した労作の中から拾ってみよう。

(野地 1977)

いわゆる double markings の例は非常に多く、英語の [-t] [-d] と同様、「た」を重ねている。

○ウーン チタ タ

○ポー イッタッタ

○アッチ タッタッタ

[澄晴 1 : 7]

ところがこれより以前の生後1年6ヶ月から正しい過去形をすでに多数使用している。

○アッタ。オッタ。

○ウーン シタ。プーイッタ。

[澄晴 1 : 7]

○アッチ イタ。オチタ。

[澄晴 1 : 6]

このように幼児の発話のみを抽出してみると一見過去形として使っているように見え、それで正しい場合もあるが、前後の状況と共に見てみると、同じ過去形が、現在形、進行形、あるいは want-to 形を用いるべき個所に使われている例がかなりたくさんある。

○アメコンコ フッテル？（父→澄晴）

○ナカッタ。（澄晴→父）

○チュンチュン ワ？（父→澄晴）

○ナカッタ。（澄晴→父）

[澄晴1：7]

○アッチ イタ。（澄晴→母。あちらへ行けという時、このように言う。

「イタ」というのも「イケ」「イク」の意に用いているのである。）

[澄晴1：7]

○チンチンブ イタ。アッチ タ。（一人言。おもちゃの電車をはしらせながらこのように、ひとりで言う。）

[澄晴1：7]

○アッチ イタ ナ ナ。（澄晴→母。向うへ行くと言う時、このように母に言う。）

○チー シタ ナ。（澄晴→母。しっこ（チー）をするという時、このように母に言う。）

[澄晴1：7]

このことは、この年齢（生後1年6～7ヶ月）の幼児には時の経過の認識がないか、あるいはあってもそれを言語で表現できないか、あるいはその表現の必要を感じていないかであろう。いずれにしても、イッタ=イクの過去、ではなく、この幼児はイク、スル、という動作の表現としては時制に関係なくイッタ、シタの語彙しか所有していないということを示している。何故過去形の方を先に憶えてそれを一般化するのであろうか。日本

語の会話では現在形よりも過去形の方がはるかに多く使われ、特に母親は幼児に向っては完了形の意味を含んで過去形を使うことが多いからであろう。

次にこの日本語児の特徴として、「タ」を直接名詞につけて動詞の意を表わそうとしている例がかなりある。

- パンツニ シッコシタラ オカーチャン ドーユーノ? (母→澄晴)
- メーン タ。(澄晴→母。パンツにしっこをするとしかられる。そのことを母がきくと、このように言う。) [澄晴1:8]
- トーチャン マンマ タ。(澄晴→父。朝食前、おにぎり(マンマ)をひとりたべて、父のところに来て、このように言う。) [澄晴1:8]
- ナイナイ シテオキナサイ。(母→澄晴)
- ナイナイ タ ナー。(澄晴→母。父のかさをもってあそぶので、しまりように母がいうと、このように言う。) [澄晴1:8]
- ブーワ キエタ。(父→澄晴)
- ブーワ タ。(澄晴→父。朝、電燈(ブーワ)が消えた時、父がこのように言うと、まねて言う。) [澄晴1:8]
- ラジオ タ。(澄晴→父。朝、ラジオにスイッチを入れ、ラジオがきこえはじめると、このように父に言う。「ラジオがついた」と言ったもの。) [澄晴1:8]

比較のためこれらと過去形の重複したものとを並べてみる。

ウーン チタ タ。                      マンマ タ。



ポー イッタッタ。                      ラジオ タ。  
アッチ タッタッタ。                      ブーワ タ。

この幼児にとって文尾の「タ」は明らかに過去形の marker であるが（メーンタ，ナイナイタは上例の状況では現在形の意味であろう。）ウーンチタの「タ」，ポーイッタの「タ」は過去と意識されていない。むしろ，ウーンチタ，ポーイッタ，アッチタッタの各々が全体でマンマ，ラジオ，ブーワに相当する一つの意味内容を表現していると考えられないであろうか。

即ち彼にとって，マンマは食べること全体，ラジオはラジオをひねって音を出すこと全体を意味し，ウーンチタ，アッチタッタは，それぞれ誰かがあるいは何かがある状況にあることを意味するために，そのことが起きた，あるいは終わった，という完了とか過去を表わすためには更に「タ」を付加しなければならないのである。従って彼にはウーンチタが名詞＋動詞の二語文という意識はなく，マンマと並列に並ぶ一つの状況を表わす set phrase なのである。これまで，幼児の発する最初の二語文はS—VであるとかV—OであるとかP—O説のような構成をしているとか，というような分析の方法がとられていたが，幼児の側から見れば，上述の如く不適切であることがわかる。

このように考えてくると，幼児の言語を成人の文法で裁断して品詞別に分けたり，その品詞の並べかたによって彼らに固有の文法があると推論することの不自然さが明らかになってくる。McNeil のP—O説の根拠となった Braine, Brown, Ervin 各々の調査を見ても，同じ語が pivot に入れられたり open に入れられたりして，わずか3人の間にさえ普遍性がない。（McNeil 1966: 22）しかもこれらの語が発話された状況，その前後関係等には一べつも与えないで，ただ発話された音声のみを抽出してそれを成人の尺度で云々するというのは，幼児の言語発達を自然な本来の姿で把えているとは言い難い。

幼児の発話をどのような文法で書き表わすことも煩雑ささえいとわなければ可能であろうが (マクニール 1972: 58), そのような労苦が人間の言語理解にどれほど寄与するものであろうか。そのような手段による言語構造の解明は, それ自身を目的とせず, 人間全体を理解するためのより広い研究の一部として活用されてはじめてその価値が認められるといえよう。Schlesingerの次の言葉は, そのような言語研究の限界をよく表現している。

The best that can be achieved thereby is a condensed description of the corpus of a particular child at a particular time, without any more general theoretical import. (Schlesinger 1976: 188)

## II 社会環境の中での全体的言語習得

### 1. Situation 無視の誤まり

1966年の Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages において Chomsky は, “some potential impact on the teaching of language” として次の四つを挙げている。

the “creative” aspect of language use; the abstractness of linguistic representation; the universality of underlying linguistic structure; the role of intrinsic organization in cognitive processes. (Chomsky 1973: 32)

そして引き続いて刺激—反応 (あるいは習慣形成) 理論を否定するために次のように述べている。

Repetition of fixed phrases is a rarity, it is only under

exceptional and quite uninteresting circumstances that one can seriously consider how “situational context” determines what is said, even in probabilistic terms. (Chomsky 1973: 32)

言語習得は専ら “intrinsic organization” の働きによるものであり、人間には誰しも “linguistic competence” が備わっているのであるから、全人類の使用する言語はその “deep structure” においては “universal” であり、その普遍性の存在は、各言語を深層構造まで分析して行けば必ず解明されるという。そしてこのような “highly theoretic” な時点では人間の “innate competence” こそが問題であって、それには “habit” “pattern” “analogy” 等は何ら関与する余地はない、と断言する。

しかし Chomsky も認めているように、

But it must be recognized that well-established theory, in fields like psychology and linguistics, is extremely limited in scope. (Chomsky 1973: 31)

どのような理論もそれが精緻であればあるほど “limited in scope”<sup>2</sup> になるのは止むを得ないことであり、逆にそのことがその理論のその部分における正確さを証明することになるのかもしれない。つまり彼の理論も、人間が持って生まれた創造的能力のうちの言語についてのみいえば、非常に鋭い、的を射た指摘をしているといえるかもしれない。同時にまた、彼が攻撃して止まない習慣形成理論も、表面の現象から見れば、言語習得の真理の一面を把んでいるといえよう。

確かに Chomsky が “explicit” に定義するまでは、人間の生得的能力——言語に限らず全ての面における——は、暗黙の了解として、あるいはごく当然のこととして、全ての理論の言及されざる大前提となっていた感

があり、彼が特にそのうちの言語能力を取り出し formulate したのは大きな功績であろう。しかしその輝かしい功績も、over-emphasize されると前述の limit を超えることもある。McNeil の P-O 説も、LAD に負わせた過大な任務も、あまりにも “formulated theory” を過大視したためであろう。そのため “habit formation” は “parrot talking” 以外はもたらさない、故にそれは人間の言語習得の過程ではありえない (Spolsky 1973: 172) という非常に視野の狭い論が続出するのであるが、彼らは何故この中に人間の幼児が親の言語をくり返している事実を含めないのか。確かに幼児は親の言葉を一字一句違えずに繰返していないという点で模倣でないといえはいえるだろう。ではおうむは、人が新しい語をいう度にそれを繰返すことができるだろうか。彼は教えられた語は発音できても、教えられないでただ一度か二度聞いただけの語は発音できない。おうむのように、たった数個の文を時も場所もかまわず繰返すのが “imitation” で、親の顔を見ながら真似ようと努力しながら、そして多くの場合何度か誤りをしながら、やがてはその文を同様の状況で発話するようになる幼児は “imitation” を行っていないのだろうか。ここでも「模倣」という語を非常に狭義に使っているので、現実からほど遠い結論が出てくるのである。

自然言語を単なる “primary linguistic data” としか見做さず、文法を組立てるための資料として用い、同時にまたその文法を実証するための証拠として利用する (このことは Oller が Russel の説を引用して鋭く追求している。1973: 40) ことが、いかに言語を非人間的なものとして扱っているか、またそれが、どんなに科学的な衣をまとっても、所詮、科学にはなれないということは Oller, Jakobovits が次に述べているように明らかである。

While a transformational grammar may represent clearly the competence of a hypothetical construct, it cannot replicate even the simplest act of communication performed by real

speakers of language. (Oller 1973: 40)

There is no guarantee that generative transformational grammar, or for that matter any other linguistic theory, will be able to account for all the facts about language which native speakers possess. This consideration, coupled with the reasonable assumption that what is not known cannot be explicitly taught, leads to the sobering conclusion that language teaching may never become an exact science, and of course, it is not now, or likely to become one in the foreseeable future. (Jakobovits 1971: 80)

幼児の周囲の言語環境の力が軽視されるとどんな誤まった言語習得理論が導き出されるかについて、Peng は次のように述べている。

But if we stop to think that the child has spent an enormous amount of time ..., more or less involuntarily for four or five years, around people who speak to him, coo to him play patty-cake with him, and subject him to those various seemingly silly things that adults, especially parents, love to do with children ..., then we cannot in earnest say that the time which the child has spent is short, that he has mastered the system rapidly (or painlessly), or that the child needs only a very small amount of data. (Peng 1976: 245)

次節で実際の資料に基づいて、この Peng の comment を証明してみよう。

## 2. 一語文は初語ではない

McNeil, Slobin, Bloom や日本の幼児言語学者の多くは、幼児の言語について語る時、初語とか一語文とかという言葉を用いて、幼児がはじめて発した語は何か、という時点から研究を始めている場合が多い。

しかし先般来日した Halliday が ICUにおける特別講演（1978. 5. 24）で強調したように、幼児は成人の文法で理解できる語を発話するはるか以前から言語を使用している。それはいわゆる音声言語よりもっと前の段階で、手話に共通する要素を持つ gesture といってもいいものである。言語が device for communication であるとするればこれはまぎれもなく言語と呼んでいいものであり、Halliday はこれに “Proto-language” という名を与えている。

手を軽く触れるか強く触れるか、低い声を出すか高い声を出すか、という段階の “protolanguage” が speech になる過程はどうであろうか。まず発話が出る以前の語の理解について、前述の野地の記録を見てみよう。

○ブーブーワ？ スミハレチャン ブーブーワ？（母→澄晴）

○……。 （澄晴、窓から右側の道路のほうをのぞくようにする。）

[澄晴 0 : 11]

○オカーチャンノ オハナワ ドコ？（母→澄晴）

○……。 （澄晴、母の鼻の頭をさす。）

○スミハレチャンノ オハナワ ドコ？

○……。 （澄晴、自分の鼻の頭をさす。しかし、これは気が向いた時だけする。）

○オトーチャンノ オハナワ ドコ？（父→澄晴）

○……。 （澄晴、思いっきり父の鼻の頭をつねるようにする。）

○ア イタイ。（父→澄晴、みんな笑う。）

[澄晴 0 : 10]

同様の例を米国女兒 Larua に見てみよう。これも家庭内における動作と発話を両親が記録したものである。

February 24, 1972 (L: 1; 04) Car—Laura understands this word. I said to her, “Come on, Laura. Let’s go bye-bye car.” She took my hand and led me from the kitchen, across the house, out the front door, and over to the car. If I say “Let’s go bye-bye,” she goes to the door as if for a walk but does not lead me to the car. Although she comprehends the word *car* in maternal speech, she does not have a specific word *car* in her lexicon. (Braunwald 1976: 36)

このような、親との声を使わない交流の後ようやく成人語に近い音が出せるようになる。これは反復して聴いたということの他に、発声器官も成人に近くなって、人間らしい発音を可能にするからである。野地澄晴ちゃんの最初の有意味音は「オッパイ」であった。

- ウンウン。(澄晴、編物をしている母のところへはいよってすがりつき、お乳をほしがっていう。)
- ……。 (母がとりあわないでそのままにしていると)
- オッパイ (澄晴、突然のびあがって大きな声でいう。母もびっくりしてお乳をのませる。「オッパイ」とはっきり言えたのではない。でも母にはとにかく「オッパイ」ときこえた。「オッパイ」の「パ」は「ブ」になったり「バ」になったりする。意識して両唇をあわせて発音しているかのようである。 [澄晴 0 : 11]

この「オッパイ」から6日後、澄晴ちゃんはまた新しい語を一つ発音した。

- ブーブー（澄晴→母。昼から母とお買物に行く途中，通る自動車を見て母にいう。自動車を見て，自分でこのように言ったのははじめてである。）[澄晴 0 : 11]

これ以後，澄晴ちゃんは自動車を見るたびに，また自分が自転車に乗せてもらったときにも「ブーブー」という。このような語の使用法こそが幼児の“creativity”を示すものであり，以後の文生成の基礎となるものである。

### 3. 幼児の言語習得過程

「オッパイ」にしても「ブーブー」にしてもこのような成人に理解可能な語が出現するまでに，どのような因子が働いているのであろうか。

- (1) その語が話される状況が何度も起った。
- (2) その語は特に幼児が強い関心を持つ物を指して使われた。
- (3) その語は特に幼児に向って話しかけられ，ゆっくりと何度も繰返して発音された。
- (4) 話された語に対して幼児が示した反応のうちのあるものは，周囲の成人を喜ばせた。
- (5) 発声器官の発達に伴って幼児自身各種の音が出せるようになった。
- (6) 発音可能な音のうち，あるものは周囲の成人を喜ばせ，その音に関連した状況をつくらせた。
- (7) 幼児は自己の発する音がある状況を設定する働きがあること——特にその音が成人がその状況で発する音に近いほど，その働きかけの力も強いこと，を学んだ。

幼児の置かれた環境が発する種々の刺激——直接彼に向けられたものもそうでないものも含めて——は，すべて幼児の感覚を通して脳の中に貯えられ，それと同時に入ってくる音や音声も同時に貯えられる。はじめは各



状況と音声との間に何の関連もないが、同じ刺戟が同じ状況（全く同じという意味ではなく類似点を抽出できるような状況）で繰返されるうち、その間に有意味な関連づけがなされてくる。

次に自己の発声が可能になってからは、自分の意志でその状況を欲する時、その状況に関連した音声を発するようになる。その発声が成人に理解可能であればあるほど、欲した通りの状況を作り出すことに成功する。これによって、かつては身振りによって目の前のものにしか言及できなかったことが、今そこに存在しないものや、未来の状況にまで言及でき、幼児の外界への働きかけは飛躍的に活発になり拡大することになる。

It is through mother-child verbal interchange and maternal behavioral response to vocalization and gesture that Laura first begins to discover the function of language. In essence, she learns that her vocalizations and gestures can serve a communicative intent. (Braunwald 1976: 33)

こうして言語の持つ力を知った幼児にとってそれを使用することは生きのびるための必須の武器となり、自分の意志を伝えるために何とかして使用可能な範囲の武器を使おう、そして更にそれをより有効なものにしよう、という努力がはらわれる。澄晴ちゃんの記録には、このような幼児の側の必死ともみえる努力が随所に残されている。（この点については1978年のICU幼児言語学シンポジウム、及びその *Proceedings* でより詳細に発表の予定。）このような幼児の意志の力を考慮に入れず、環境からの刺戟もそれへの適応も排除し、ただひたすら“innate linguistic competence”のみが言語習得を可能にする力を持ち、その秘密はすべてLADの中にある、としてしまったら、いったい言語は人間の生存にとってどれほどの価値を持つのだろうか。そもそも言語が発生した時点では、それはあくまでも厳しい自然の中で生きのび種を守るための人間の工夫ではなかったのか。

人間の胎児が超スピードで人間の発生の歴史をたどっているという事実を考えてみる時、幼児の言語の習得も、人間の言語の発生の歴史をたどっているのではあるまいかと考えさせられるのは、あながち不自然ではあるまい。そのような観点に立つ時、言語生得説はどのような説得力を持ちうるであろうか。

### References

Bloom, Lois

1970. *Language Development: Form and Function in Emerging Grammars*, Cambridge: The MIT Press.

Braunwald, S. R.

1976. "Mother-Child Communication: The Function of Maternal Language Input," in *Word*, 28-50.

Chomsky, N.

1973. "Linguistic Theory," in *Focus on the Learner*, 29-35.

藤永保編

1973. 児童心理学——現代の発達理論と児童研究, 東京: 有斐閣

藤永保, 高野清純編

1975. 幼児心理学講座第二巻, 認知の発達, 東京: 日本文化科学社

芳賀純

1975. 「言語の発達」 幼児心理学講座第二巻, 168—204.

Jakobovits, L. A.

1974. *Foreign Language Learning: A Psycholinguistic Analysis of the Issues*, Mass: Newbury House Publishers.

マクニール, D. 佐藤方哉他訳

1972. ことばの獲得, 東京: 大修館

McNeil, D.

1976. "Developmental Psycholinguistics," in *The Genesis of Language*, 15-84.

村井潤一他編

1976. ことばの発達とその障害, 東京: 第一法規

村田孝次

1968. 幼児の言語発達, 東京: 培風館

野地潤家

1977. 幼児期の言語生活の実態 I, 広島：文化評論出版
- Oller, J. W., Jr. and J. C. Richards, eds.  
1973. *Focus on the Learner: Pragmatic Perspectives for the Language Teacher*, Mass: Newbury House Publishers.
- Oller, J. W. Jr.  
1973. "Some Psycholinguistic Controversies," in *Focus on the Learner*, 36-50.
- Peng, F. C. C.  
1976. "The Deaf and Their Acquisition of the Various Systems of Communication: Speculation Against Innatism," in *Word*, 225-246.
- Schlesinger, I. M.  
1976. "Acquisition of Grammar: What and How Should We Investigate?" in *Word*, 187-194.
- Slobin, D. I.  
1966. "Comments on 'Developmental Psycholinguistics: A Discussion of McNeil's Presentation,'" in *The Genesis of Language*, 85-91.
- Smith, F. and G. A. Miller, eds.  
1966. *The Genesis of Language: A Psycholinguistic Approach*, Mass: The MIT Press.
- Spolsky, B.  
1973. "What Dose It Mean to Know a Language, or How Do You Get Someone to Perform His Competence?" in *Focus on the Learner*, 164-176.
- Von Raffler-Engel, W and J. Macris, eds.  
1976. *Word, Journal of the International Linguistic Association: Child Language—1975*. Volume 27, Number 1-2-3, April-August-December 1971. London: William Clowes & Sons, Ltd.
- 吉田泰子  
1976. 「二語発話の発達」 ことばの発達とその障害, 192-204.

# Fundamental Problems in Language Innate Theory

Motoko Hori and Fred C. C. Peng

Though in some respect, the generative-transformatinal grammar has opened a new door to the structural analysis of a language, it should not be overemphasized or overclaimed to have direct relation with the process of language acquisition. The common mistake often seen among Japanese psychologists is to quote a well-known figure, e. g. McNeil and his pivot-open hypothesis, in describing the process of language acquisition, as if it were a new scientific notion in the field.

This trend, however, has ceased over the past few years; instead, developmental psychologists and psycholinguists have now turned away from the pivot-open hypothesis by ignoring it albeit expressing no overt disagreement.

In the present paper, three weakpoints of the innatist view concerning language acquisition are singled out for discussion. (1) The contradiction in pivot-open hypothesis itself, (2) McNeil and other innatists' wrong interpretation of the child's utterances such as 'comed' 'goed' etc.' and (3) the narrow and restricted viewpoints of the child's language acquisition based on grammatical development.

In order to verify the above comments, some data taken from the diary of a Japanese boy which was kept from birth to six years by the boy's parents will be used, giving special attention to the child's language development.

A good number of utterances by this child are shown in the present paper which inevitably lead to a conclusion that language

acquisition depends to a great extent on the input from the environment. The willingness of the child to adjust himself to his surroundings is the major force that drives him to use whatever tools he can manage within his power. The verbal utterance is one of those tools and the creative aspect of linguistic ability is the overt result of his endeavor, which might possibly have been of the major factors promoting the young *Homo erectus* to invent and use the very first human language.

The first hominid "language" probably evolved from communication systems that resembled those of present-day apes. (P. Lieberman, *On the Origins of Language*: 158)